桃花笑春風

猛暑の足音が聞こえてくるというのに、あえて春の話題。桃花笑春風。「とうかしゅんぷうにえむ」と読む。人の世の無常さを表している漢詩だ。あの人はどこに行ってしまったかわからないけれど、桃の花は変わらずに春の風にほほ笑んでいる。コロナウイルスが世に蔓延したパンデミックの際にも、美しさを競い合うのを忘れなかったから、花は健気だ。一方で、厳しい冬を耐えてほころんだ瞬間に、やがて散りゆく儚い運命を背負うことになるのも花だ。良寛和尚は禅語に詠んだ。

〝散る桜　残る桜も　散る桜〟。

桜は年2回楽しむもの。さくらもみじの秋に、己の人生を重ねてみるのも趣があっていい。死因は様々だが、人は必ず死を迎える。人間の死亡率は100％だ。家族や友人との別れの時は誰にでも必ずやってくる。それでも花は咲き、去年と同じように鳥は鳴く。この春、散りゆく桜の花びらを眺めながら、皆さんは何を思っただろうか？

3月11日、岸田首相は福島県で行われた東日本大震災の追悼復興祈念式典にいた。そこで、震災の教訓を風化させることなく、国土強靱化計画の実現に向けて不断の努力を重ねると語り、災害に強い国をつくっていくことを誓った。復興庁の発表によると、東日本大震災と原発事故に伴う避難者数は2万9328人。関連死を含む死者・行方不明者は2万2222人だ。

避難所100あらば

震災当時、高校の教頭として学校避難所の運営を担っていた男性がいる。その語り口はとても穏やかだ。しかし、内容は生々しく、過酷な避難所の状況を僕らは思い知ることになった。ブルーシートに包まれた遺体が安置されている体育館のすぐ横に避難者がご飯を食べる食堂があり、生と死の境界が確かにそこに存在したと男性は言う。生きるために食事をする場所とブルーシートに身を包んだ死者が横たわっている場所が隣り合う現実の中で、その学校に身を寄せる人たちは最大400人となり、44日間の避難所運営は熾烈を極めたという。命の尊さや今日という日の大切さを、今一度見つめ直さなければならないだろう。

指定された避難所ではなかったため、運営マニュアルなど存在しなかった。行く場所がなくて津波のような勢いで押し寄せてくる避難者への対応は想定をはるかに超えた。「薬、お湯、タオル、ペット」。次から次へと舞い込んでくる難題に一刻の猶予も許されず、即断即決を繰り返したという。〝悲観しながら準備をして、楽観しながら対処する〟。そんな言葉もよく聞くが、避難所運営にも当てはまるのかは疑問だ。「100の避難所があれば、その運営方法は100通りなんです」。男性の口からこぼれる一言ひと言に強い説得力がにじむ。「いざその場に立った時に、ぶれないことですよ。何が正解かなんてわからない。その場で判断する覚悟。それだけです」

〝災間〟という言葉がある。過去の災害と将来の災害、災害と災害の間を僕らは生きているのだ。過去の災害を風化させず、いかに備えるのか。しかし、避難所で働くべき職員も被災者となるかもしれず、指定された避難所だけで対応できるかも疑問だ。遺体番号205番、男性が避難所運営を担った体育館には、自らの叔父の遺体があったという。悲しんでいる暇さえなかったが、夜になって布団に入ると胸が押しつぶされそうになったという。

台湾でも震度6強の地震が発生したばかりだが、避難所の映像は衝撃的であった。発災直後にもかかわらず、避難者のプライバシーを守る間仕切りが設けられ、温かい食事も提供されていたのだ。平時の際にコツコツと地道に築いてきた行政との信頼関係が存在するからこそ、地元企業やボランティア団体が有事の際にも献身的に動いてくれる。あの映像は原点を見つめ直すことの大切さを教えてくれたような気がする。日本でも同じことを！　そう考えるのは短絡的なのだろうか。焦って欲を出して一気に解決しようとしてもうまくいかないのが人間の常だ。

「ガチョウと黄金の卵」という寓話がある。昔々、ある村にたいそう貧乏な農夫が暮らしていた。ある日、農夫は迷子になっていた1羽のガチョウを助けた。不思議なガチョウで、毎日ひとつずつ金の卵を産んでくれた。農夫はその度に金の卵を売り、やがて裕福な生活が送れるようになった。欲が出た農夫は、1日にひとつしか卵を産まないガチョウを不思議に思い、その首を押さえつけてお腹を切った。金の卵がゴロゴロ入っているはずだと大いに期待して農夫はガチョウのお腹を開けてみたが、中には何もなかった。

（文章よくなる株式会社代表取締役　工藤勝己）